

熊本大学

ことしの研究テーマ拝見

医学・薬学部

水俣病の発生“究明” 小児マヒ 生ワクチンの毒性も

さる二十九年に発生し、八十四人の患者のうち三十四人が死亡した

という“水俣病”の研究は、昨年度医学部でその原因となる物質の研究が行なわれた。そしてその結果、水俣湾中のヒバリカイモドキから有機水銀化合物の分離に成功しているが、なお今年度も続けられる。ことしの研究テーマは「代謝と疾病」とに水俣病の酵素学的研究(代表内田慎男教授)と「水俣病原因物質の生成機序ならびに作用機序」(代表世良完介教授)の二つの研究である。前者の研究は補助金八百五十万円が本決ま

たす役割は大きい。技術革新の波にのつた“理学提攜”の呼び声はもとより、地方文化のセンターとして大学は重要な機能を持っている。では熊本大学は今年度どんな研究がすめられるのだろうか。同大学の各教室から文部省に対して補助金申請が出された研究数はさうと二百件に近い。そのなかから最も熊本県民に身近な問題や、興味あるテーマ、懸案となっている研究課題をとりあげ、順次における研究の全ぼうを紹介しよう。

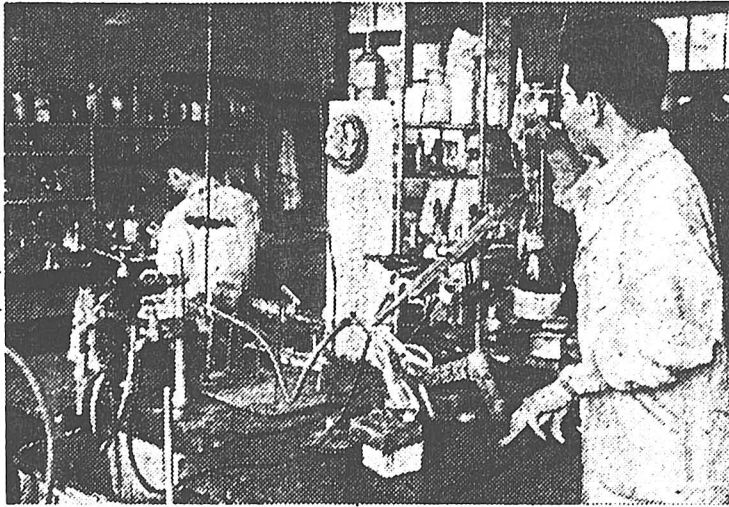
りとなっており、分離結晶された有毒物質を使ってどうして水俣病が発生するのか、とくに手足がふるぶる露える症状から人間の神経にどんな影響を及ぼすのかを研究する。動物実験にはネコが使われるが、治療法がまだないので本研究の完成が待たれている。

◆ ◆ ◆
全国一のみほ豚果といわれる本県の小児マヒについても、医学部で二

つの研究が計画されている。入鹿山且郎教授の「弱毒ボリオウウイルスの研究」と貴田丈夫教授の「小児マヒの免疫学的研究」である。話題を投げたソークワクチン(ホルマリン不活化ワクチン)は小児マヒ予防に大きな貢献をしたが、小児マヒウイルスが口から腸に入

り中枢神経系統へ侵入するケースにはきかない。生ワクチン(飲むワクチン)も実用化されてはいるが、毒性がのこっているため、いつ体内で強毒となり小児マヒを起さないとも限らない。日本ではそのため一般の使用がまだ許可されないほどだが、その基礎的な研究を行なうとともに、体に対する干渉現象を究明する。

◆ ◆ ◆



研究室薬学部のいどに、ガン